

浄瑠璃・世話物

「夕霧阿波鳴渡」

◎初演 正徳二（一七二二）年初春 竹本座

「ナンバーワン遊女・夕霧の面影伝えて三十五年」

あらすじ

上之巻

（新町吉田屋）

年の暮れ、餅つきでにぎわう大坂新町の揚屋吉田

屋で、阿波の若い侍に呼ばれた扇屋の遊女夕霧と、夕霧に入れ込んで勘当中の藤屋伊左衛門が、二年振りに顔を合わせる。夕霧は、阿波の侍平岡左近に、左近の子と欺いて預けた伊左衛門との子どものことを話し、二人で案じている。そこに、阿波の若い侍、実は扮装した左近の妻お雪が現れ、「子どもをそのまま私たちの実子として育てさせてほしい」と頼む。

中之巻（平岡左近借屋敷）大坂上本町の平岡左近の借屋敷に、お雪の心くばりで乳

母として雇われることになった夕霧が到着。かごかき姿で同行した伊左衛門とともに、立派に成長した平岡家の跡取りである我が子源之介と対面、すがりついて泣く。その様子を見た左近は、お雪の反対も押し切り、源之介を両親ともども追い払う。

下之巻（新町扇屋）再び扇屋に引き取られた夕霧は、病が悪化し、明日をも知れぬ命。そこへ、伊左衛門親子があわれな芸人姿で現れ、主人の温情で夕霧と対面する。お雪の使いと伊左衛門の母もかけつけ、「せめて廓くわの外で往生おうじょうさせたい」と、それぞれ夕霧を請け出す大金を持参する。これを受けて力を得た夕霧に、奇跡が起こる。



見どころ 夕霧は大坂の歓楽街である新町で、絶大な人気を誇った実在の太夫たゆう（最上位の遊女）です。延宝七（一六七九）年正月、二十二歳（一説には二十七歳）の若さで病没した後、その人気をしのいで、夕霧を主人公とした劇が数多く上演されました。近松と名コンビを組むことになる歌舞伎役者坂田藤十郎は、伊左衛門役で一躍スターとなり、生涯十八度も夕霧劇に出演したと言われています。夕霧没後三十五回忌を記念して書かれた人形浄瑠璃『夕霧阿波鳴渡』は、他の世話物作品とは違い、心中や犯罪などの事件は起こりませんが、近松が自慢のすばらしい筆さばきで書き上げた叙情的な作品です。近松はこの作品で、初演三年前に没した藤十郎の芸をしのいでいたのかも知れません。